

# TEST REPORT

## フィルム・デジタル両用の MJ ビューカメラアダプター 45

萩原 俊哉

メディアジョイから「MJビューカメラアダプター」が発売された。これは4×5インチ判または6×9cm判用の国際規格のアダプターとEOSマウントなどの各社マウントがセットになったボードで、4×5インチ判あるいは6×9cm判のビューカメラの後枠に装着することで、35mmフィルムカメラやデジタル一眼レフカメラを使って大判カメラの豊富なアオリ機能を利用したさまざまな撮影を行うことができるというものだ。したがってフィルム、デジタルの区別なく、またフルサイズやAPS-Cサイズなど撮像素子のサイズにかかわらず使用することができる。

フランジバックが4×5カメラのフィルム面よりも後退することになるため、150mmより短いレンズを使う場合は袋蛇腹や凹レンズボードを使用したほうが使い勝手がいい場合もある。もちろん大判カメラのピントグラスは使用せず、装着したカメラボディのファインダーでピント調整や確認を行う。

また、フィールドタイプのカメラであっても国際規格バックならば本製品の装着が可能であるが、精度の高いアオリ操作を行うためにはビューカメラのほうが優っている。そして本製品はティルトやライズ、フォーカス、シフトといった大判カメラのもつ豊富なアオリ



MJビューカメラアダプター 価格：4×5インチ判用38,000円（EOS、FD、F、M42、PK、OM、MD）、6×9cm判用36,800円（EOS、FD、F、PK、OM、MD） 問合せ：メディアジョイカメラ (075)257-5435 <http://www.mediajoy.com/mjc/>



機能を、35mmフィルム一眼レフカメラやデジタル一眼レフカメラで実現することはもちろんだが、デジタル一眼レフカメラを使用する場合、本製品の後枠を平行移動して多分割撮影を行い、それをフォトタッチソフトなどで1つに結合することでファイルサイズの大きなデータに仕上げるといったことも可能となるのだ。

写真2は6分割して撮影したデータを1つに結合してまとめたものだ。使用した機材はMJビューカメラアダプター4×5、キヤノンEOS 1Ds Mark II、トヨビュー45G、ニッコールW 210mm F5.6という組み合わせ。実際の撮影では上段右、中央、左の3点、下段右、中央、左の3点の合計6点に分割して撮影している。パノラマ撮影同様に後枠をきっちり平行移動させて行なわないと微妙なずれが生じてしまうため、動かす枠はレンズ側ではなくカメラが装着されている後枠を動かすことが

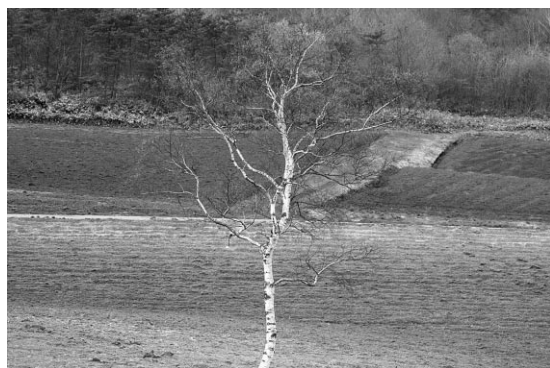


写真1 ストレートに撮影したものが左写真。このレンズは開放F値がF5.6なのでシラカバにピントをあわせて絞り開放で撮影してもあまり浮き出て見えない。そこで、大判カメラのアオリ機能をフルに活用して中央にある被写体を浮き出すように操作を行なったものが右写真だ。絞りF5.6・1/400秒、トヨビュー45G、ニッコールW210mm F5.6、キヤノンEOS-1Ds Mark II、マニュアル、シャッター速度1秒

基本だ。画像の重なりはある程度多めのほうが後で結合するときにあわせやすい。もちろん最初のカットから最終のカットまですべての条件が同一である必要がある。ライティングやピント位置などが変わってしまうと不自然になってしまうからだ。そのような意味でも、ライティングや環境をコントロールできる商品撮影などのスタジオ撮影では問題はないだろう。

しかしアウトドアの風景撮影では、天候状態はもちろんのこと風の影響をうけて微妙に花や樹などの位置が変わってしまうと後で画像を結合する場合にうまくいかなくなる場合がある。近中距離の花や樹木の撮影などでは完全な無風状態での撮影でないといむずかしい。デジタルカメラ側のシャッター速度は、バルブではなく一定の時間に統一したほうがいいだろう。

今回の撮影ではEOS 1Ds Mark IIの設定はすべてのカットでシャッター速度1秒としている。ノイズが少ないカメラなのでこの程度のシャッター速度ならまったく問題はない。また手動で絞り値を選択する大判レンズの場合、1度絞り値を変えてしまうとまったく同一の絞り値にもどして撮影することは難しくなる。画像確認のために、絞り値を一度開放にしてから設定値にもどしても微妙に異なってしまう場合があるので、今回もレンズ側で一度設定した絞り値とシャッター速度はまったく変更せずに撮影を行っている。また、撮影モードは後からの微調整が容易に行えるRAWにしておくといい。

先ほども述べたが今回の画像は6分割で撮影したものを1枚にまとめている。最終的に結合した画像は7,100 × 5,900ピクセルで4,189万画素の画像となった。JPEGで最高画質で保存したところ、33.6Mほどのファイルサイズだ。

筆者の使用しているPCはPentium4、2.40GHzでメモリーは1GBほど積んでいる。しかしこれだけの画像を結合するには処理の時間がかかりすぎて少々役不足であった。このような作業を快適に行うためには画



写真2 6枚の画像を合成した。広大な山岳風景は比較的容易に結合しやすい。この日は雲1つなく、またほとんど風も吹いていなかったため、最初から最後のカットまで同一条件で撮影できたことは幸いだ。このような分割して撮影する場合は、あらかじめファインダーを見ながら後枠を平行移動させて確認しておく、結合した後のイメージがつかみやすい。  
絞りF11・1/250秒、トヨビュー45G、ニッコールW 210mm F5.6、キヤノンEOS 1Ds Mark II、マニュアル、シャッター速度1秒

像を処理するパソコンのCPU、メモリーともにある程度のレベルは確保しておく必要があるだろう。

このように画像を結合して1つの高画素ファイルを作るという作業は、とくに画素数の少ない600万～800万画素クラスのデジタルカメラに使用すると効果的だ。後で画像を結合するという手間はかかるものの、単純に画素数だけみれば、高価なデジタルカメラバックを購入することなく3000万画素を超えるデータを手に入れることができることは大きな利点だ。

いまや600万～800万画素クラスのデジタル一眼レフカメラはボディ単体で実売価格で10万円を下回るものも現れてきている。すでに大判カメラという資産があればコストパフォーマンスにも優れたシステムを構築できるといえるだろう。

発売当初はEOSマウントのみであったが、この5月10日にはFD、F、PK、OM、M、MDなどの各社マウントも発売された。大判カメラの豊富なアオリ機能が自由に使えるということはもちろんだが、かつて高価なデジタルカメラバックでなければ得られなかった高画素のデジタルデータを、普及機デジタル一眼レフカメラで得ることができるという点においても本品の存在価値は高いものがある。

(はぎはら としや：萩原写真事務所)